

ゲリラ豪雨からの学び！

局地的な大雨「ゲリラ豪雨」による急激な増水で子どもたち5人が犠牲になった神戸市灘区の都賀川増水事故から1年、私たちはあの悲しい事故から何を学び、何ができるようになったのでしょうか？

兵庫県 都賀川沿いの14カ所に大雨・洪水注意報と警報の発令に連動し、ラジオ局の電波で回転灯を作動させる増水警報システムの設置。



神戸市 河川モニタリングカメラシステムの導入やレインマップ250の配信。**国土交通省** 「川の防災情報」では、レーダー雨量やテレメータ、洪水予報等。

このように、数々の防災情報システムが構築され「ハード防災対策」が進められました。しかし、素晴らしい防災システムが構築されても、回転灯が光っても川から離れない人がいるのも事実です。ましてや「防災情報システム」すら知らない人がいるとも聞きます。

さて、そのような人たちが回転灯やサイレンが鳴った場合、果たしてどのくらいの人たちが避難するのだろうか？「危険が近づいている」と判っていても、その場から逃げない人が多いのも事実であり「誰かが逃げたら私も逃げよう」と思っている人が大半のように思われます。考えれば「**自分の命を他人に託している人が多い**」のです。これらはどの災害対策、防災対策でも言えることです。

行政が推し進める「**ハード防災**」だけでは、次の災害による被害を防ぐことは不可能です。一般市民が危険を伝承していくシステム「**ソフト防災**」を含む「複合防災システム」が必要な時期にきています。

昔からの言い伝えには、多くの教訓が含まれています。



たとえば「入道雲がでたら早く家に帰る」警報がでたら家からでない」「雨の日に傘を差して川沿いを歩かない」「お盆を過ぎたら海や川へ行かない」「元々ここは川や池だった」等々、その地域において色々な役立つ言い伝えがあったものです。

ところが、マスメディアが発達した現在「全国一律の防災意識」があたかも正しいかのように、どの災害が発生しても同じように報道がされます。一般市民にとっては「きわめて断片的な情報」でしか災害を理解していないとも言える時代なのです。

異常気象と言われる今日、私たちは「言語化された明瞭なデジタル的知識の必要性と共に、経験や五感から得られるカンやコツのようなアナログ的知識」も過去の教訓を通して、学習しておく必要性に迫られています。

大雨時の防災対策

大雨による災害から身を守り、財産の被害を防ぐための心がけです。



テレビ・ラジオ・新聞が伝える気象情報に注意常に最新の情報を聞くようにしましょう。

大雨は深夜から早朝にかけて降りやすい傾向がある雷を伴った雨には注意しましょう。災害は、備えのほころびについて人々の命や暮らしを脅かします。

自分で雨量を確認

1時間に20ミリ以上、降り始めてから100ミリ以上になったときは被害のでる恐れがあるので、強い雨が降ったら、家の周りの安全を確認しましょう。

危険な場所に近づかない

雨で増水した小川や側溝、マンホールは境界が見えにくくなり、転落事故がおこりやすくなります。

土砂災害の次のような前ぶれに気づいたら避難

- (1) 雨が降り続けているのに川の水位が下がる
- (2) 急に川の流が濁り流木が混ざる
- (3) 山鳴りがする
- (4) がけに割れ目が見える
- (5) がけから水が湧き出る
- (6) がけから小石がぱらぱらと落ちる

まわりの人に知らせていっしょに逃げましょう。

危険を感じたり、防災機関から指示があったら速やかに避難

「むだ足覚悟で早めの避難」を心がけてください。

避難の際は両手が自由に使えるように

持ち物を最小限で背中に背負うなどして、とっさのとき両手が使えるようにしましょう。浸水の場所から避難するときは、とくに履物や足もとに注意。子どもやお年寄り、障害のある人から目を離さず、手を引くなど手助けを忘れずに！

自分の住んでいる地域を知る

過去に、洪水・浸水や山崩れがけ崩れの災害が発生したことがあるか、またどんな危険があるか調べておきましょう。



危険区域・ハザードマップや防災地図は最寄りの市町村役場やホームページで見ることができます。日頃から災害に備えておくといざ避難のときに役立ちます。

情報の収集方法

兵庫県（地域の風水害対策情報）

<http://www.hazardmap.pref.hyogo.jp/hazmap>

兵庫県（気象防災情報）

<http://hyogo.bosai.info/>

国土交通省（川の防災情報）

<http://www.river.go.jp/>